

# 音楽科の学力育成に視点をあてた小学校音楽科学習指導 — 基礎的な能力と音楽的な感受の両立を —

## Teaching Methods and Techniques in an Elementary School Music Department

-Aiming to Enhance both Basic Ability and Musical Sensitivity-

緒 方 満

Mitsuru OGATA

キーワード：音楽科教育 音楽科の学力 基礎的な能力 音楽的感受 小学校音楽科学習指導

### 1 はじめに

我が国の音楽科がめざす子ども像は、「楽しく音楽にかかわる」子ども〔第1学年及び第2学年〕、「進んで音楽にかかわる」子ども〔第3学年及び第4学年〕「創造的に音楽にかかわる」子ども〔第5学年及び第6学年〕と考えられる（文部科学省2008）。具体的な第5学年及び第6学年の子どもの姿を、歌唱・合唱授業で言えば、自ら主体的に練習を行いつつよりよい歌唱・合唱表現を創り上げ響きのある豊かな歌声で歌う子どもであると言えよう。鑑賞の授業で言えば、学習対象の音楽について相互に意見交流しながら知識・理解を深めつつそれぞれの思いや考えを広げている子どもであると言えよう。

はたして実際のところ、現在の小学校音楽科授業において上記のような望ましい子どもの姿が見られるのであろうか。各地で行われている音楽教育研究大会の公開授業で見る子どもたち、あるいは音楽教育雑誌に掲載された実践で登場する子どもたちは、まさしく「楽しく音楽にかかわる」子ども、「進んで音楽にかかわる」子ども、「創造的に音楽にかかわる」子どもであることが多い。多くの参観者の前で、豊かな合唱を表現したり、鑑賞に関する活発な意見交流をしたりする子どもは、めざすべき理想的な子ども像に近いと言える。公開授業や雑誌で紹介された子どもたちの姿は音楽科授業に携わる者に多くの示唆と希望を与えてくれるし、子どもたちを指導した教師たちの研究成果は我々の財産であり今後の貴重な資料となろう。

しかしここで捉えねばならない子どもの姿は、その他の圧倒的に多くの音楽科授業での一般的な子どもの姿である。筆者は教員養成系大学において小学校音楽科教育法を担当しており、その講義において受講学生に彼ら自身の受けてきた音楽科授業の様子をしばしば聞く。また、小学校現場で実際に授業実践者となった卒業生から授業に関する相談を受けることがある。それらを総合して浮かび上がる子どもたちの姿は、もちろんすべてではないが、望ましい姿とはほど遠い正反対の音楽活動に消極的な姿であることが多い。

今から述べる見解は筆者の推測の域を超えるものではないが、音楽科教育の成否は、現在のところ音楽科担当教師の指導力量の違いによって多分に左右されているのではないか。つまり、研究会で授業を公開したり教育雑誌に実践を投稿できるような格別に指導力量の高い教師の授業実践では望ましい子どもの成長が多く見られる一方、その他の一般的な小学校教師による多くの授業実践ではすべてではないにしろ成果が十分に見られないという、2極分化の傾向にあるのではないだろうかと推察している。

そうであるならば、一般的な小学校教師にも無理のない範囲で十分に取り組める小学校音楽科学習指導の改善が必要である。そこで本稿では、より多くの子どもたちを「楽しく音楽にかかわる」子ども、「進んで音楽にかかわる」子ども、「創造的に音楽にかかわる」子どもに成長させるための音楽科学習指導の工夫について、これまで行われてきた学習指導の問題点を指摘したうえで、より望ましい方策を提言していきたい。筆者の提言が、多くの教師にとって自らの授業実践を改善するための契機になればと考えている。

## 2 音楽科の学力とその習得状況 —「基礎的な表現の能力」に着目して—

さて、「楽しく、進んで、創造的に音楽にかかわる」ために必要な条件、すなわち主体的な音楽表現活動、活発な音楽鑑賞活動を行うために必要な能力について考えてみたい。この必要な能力は音楽科の学力と言い換えてよい。そこで本章では、音楽科の学力とは何か、さらにそれは現在どのような習得状況にあるのか考えてみたい。

諸説あろうが、筆者は以下のような音楽科学力に関する見解を長年にわたり一貫して主張してきている。設定すべき音楽科学力は、『小学校学習指導要領解説音楽編』（2008）に示された「学年の目標」の3点の観点がそれを最も端的に示している。その3点とは「音楽活動への態度と習慣」、「基礎的な表現の能力」、および「基礎的な鑑賞の能力」である。すなわちこの3点のそれぞれが音楽科の重要な学力であること、すべての子どもたちがこの3点を習得できるように保障することが音楽科教育の責務であること、加えてこのことが真に実現できる音楽教育プログラムの開発が急務であること等、が筆者の従来からの主張である。この3点が学力として身につけば、未知の歌を楽譜から読み取って歌うなど自らの意思による独立した音楽活動が可能である。

3点のうち、最も客観的に学力の習得状況を評価できるのは「基礎的な表現の能力」である。態度と習慣が身についたかどうか、および鑑賞の能力がどの程度かの2点を明らかにするには、子どもの心理的側面を何らかの方法で明らかにする必要がある、かなり困難である。しかし「基礎的な表現の能力」は、子どもの基礎的な音楽表現を体系的な方法で測定することが近年可能になってきている。小学校を卒業し、中学校へ入学した直後の中学1年生の音楽科学力の状況を示す次のような研究報告がある。

吉富他の研究（2008）では、387名の中学1年生を対象とした「基礎的な表現の能力」の実態調査を行い、一般的な中学1年生、すなわち音楽科授業を唯一の音楽学習機会とする中学1年生の階名で聴唱・視唱できる能力および歌詞をつけて視唱できる能力、つまり先ほど述べた独立した音楽活動に不可欠な音楽能力が非常に低いことを明らかにしている。吉富らは「一般的な中学1年生が小学校学習指導要領に示された水準を悲惨な状況で達成していなかった」と言及している。また、中学校の音楽科授業の状況について、小川（2008）は「一般の公立中学校においては、教科書に掲載されている楽譜を正確に演奏できる生徒の数はきわめて限られており、教師は合唱指導や器楽指導において、譜読みや音取り等のアンサンブル以前の指導をすることを年中余儀なくされている。〔中略〕読譜視唱ができない状態で中学生の合唱をまとめ上げることは新任の教師にとって至難の業といえる」と指摘する。

これらの研究報告等から、一般的な子どもたちの「基礎的な表現の能力」は低い水準のレベルにあることが明白である。つまり研究会で授業を公開したり教育雑誌に実践を掲載しているような教師の授業実践でみられる望ましい子どもたちの姿とは別に、一般的な多くの子どもたちは「基礎的な表現の能力」が低められたままであるがゆえに「楽しく進んで創造的に音楽にかかわる」までに

至らないのである。したがって、このような状況を打破できる「基礎的な表現の能力」が確実に身につく音楽科学習指導の改善が急務である。

### 3 どのような指導方法で音楽科の学力を育成すべきか —エクササイズアプローチの導入を—

では、どのような学習指導を行えば「基礎的な表現の能力」、すなわち音楽科の学力を育成することができるのであろうか。どのような音楽教育プログラムを実践することが有効か、このことが本章での論旨となる。だがその前に、我が国の音楽科教育では、なぜ音楽科の学力を育成することが難しいのかについてみておく必要がある。

米国の音楽教育研究者フィリップス（1996）は、歌唱指導の方法をソングアプローチとエクササイズアプローチとの2つに大別する考え方によって、米国の音楽科教育の問題点を指摘している。簡略して言えば、ソングアプローチとは子どもに歌を次々と歌わせることを多用する指導手法であり、エクササイズアプローチとは発声の学習、聴音トレーニング、視唱等を中心とする指導手法である。ソングアプローチでは発声練習等のスタイルにとらわれず多くの歌を楽しみながら活動できるので子どもたちに受け入れられやすい。一方、エクササイズアプローチでは音楽教育用に意図的に作られた課題を学習することが中心となり子どもたちが消極的な側面を見せることもしばしばである。米国では、音楽科教育創設期の19世紀終わりから20世紀初頭まではエクササイズアプローチを中心とした指導であったが、徐々にソングアプローチへと変化していった。フィリップスは、ソングアプローチが歌うことだけを目的にしたときの危惧について指摘し、エクササイズアプローチ導入の重要性を主張していた。

表1 ソングアプローチとエクササイズアプローチの比較

	ソングアプローチ	エクササイズアプローチ
使用される教材	さまざまな歌唱教材曲	音楽教育用に意図的に作られた課題
目的	総合的な音楽的成長	基礎的な表現の能力の成長
我が国における現状	主流であり多用される傾向（関心・意欲の重視）	重要性が示されながらも形骸化の傾向（基礎・基本の軽視）
長所	楽曲のもつ趣や魅力と接しながら多くの楽曲を歌唱し覚えることができる。	聴覚的および視覚的に常に音高やリズムと対峙するために基礎的な表現の能力の成長を促進することができる。
短所	1つの旋律を丸暗記する形で覚え込みそのことだけをよりどころとして歌唱する児童も出現する。（基礎的な表現の能力が育成されにくい）	子どものモチベーションを持続させることが難しくそのことを克服する指導の工夫も確固たるものが存在せず教師が取り組みづらい。

\* 緒方ら（2006）作成の表を本稿用に転用・一部改変して掲載している

このフィリップスの考え方に依拠すれば、我が国の音楽科授業もソングアプローチ的な色合いが濃いと言える。我が国の授業は、子どもが意欲的積極的に取り組む音楽表現活動が大部分を占めるからである。例えば、楽譜が正しく読めるようになるためのトレーニングを定式化して実施したり、

視唱能力を徹底的に鍛えたりすることはほとんど行われぬ。したがって、我が国においてもフィリップスが指摘する米国と同様の危惧が十分に存在すると考えてよい。その結果、音楽科は本来音楽科が育成すべき音楽科の学力を、子どもたちに習得させることが形骸化していると考えられる。先述した吉富らの調査結果はこの事実を何よりも雄弁に物語っている。

上記の観点から、階名で聴唱・視唱できる能力、歌詞をつけて視唱できる能力、および楽譜を正確に演奏できる能力を子どもたちに育成するにはエクササイズアプローチによる学習指導を取り入れることが有効である。エクササイズアプローチは、子どもたちを聴覚的にも視覚的にも常に音高やリズムなど音楽の諸要素と対峙させることができる。

さて、エクササイズアプローチをどのように授業構成に組み込むか。端的に言って、1つの授業にソングアプローチとエクササイズアプローチとを併用すればよい。ここで「二本立て方式」を紹介したい(菅 2001)。我が国の音楽科教育実践の歴史の中に、1960年代に成果をあげた「二本立て方式」の実践がある。この「二本立て方式」は、授業を2分割しA学習とB学習とを行うものであった。A学習は子どもの豊かな音楽表現活動を学習の中心とした学習であり、B学習は子どもの音楽能力の育成に特化した学習であった。全国的な広がり、定着には至らなかったが、今でも音楽教育研究者の間では評価の高い実践である。筆者の主張は「二本立て方式」の採用である。従来のA学習をソングアプローチによる学習活動と考え、従来のB学習をエクササイズアプローチによる学習活動と考えて授業を構成できないか。そうすれば、これまでの授業形態を大きく損なわず、しかも「基礎的な表現の能力」の育成も系統的な指導体制が整うはずである。

もっと現実的な対応で言えば、音楽の授業は1つの授業におけるメニューが豊富であれば豊富であるほど教師にとって授業が行いやすいし、子どもにとって授業を受けやすいという性質がある。そうすると、①授業の冒頭の導入部分、②B学習〔エクササイズアプローチ〕、③A学習〔ソングアプローチ〕、および④授業の終末におけるまとめ、という4段階の授業構成も効果が高いと推察できる。

#### 4 音楽科学習指導の工夫 ―「リトミック音楽教育法」をモデルに―

##### (1) 音楽学習に不可欠な音楽的感受

ここまで、①「楽しく音楽にかかわる」子ども、「進んで音楽にかかわる」子ども、「創造的に音楽にかかわる」子どもを育成することが重要であること、②そのために「音楽活動への態度と習慣」、「基礎的な表現の能力」、および「基礎的な鑑賞の能力」を音楽科の学力として設定しそれらの音楽能力を子どもたちに着実に習得させること、③その習得にはエクササイズアプローチを導入し授業を2本立てで行うことを述べてきた。

基礎的な音楽能力を育成する学習を、定式化して系統的に実践することの重要性は、ほとんどの教師が認識している。しかしながら、実践を遂行することは非常に難しい。明るく元気な歌を快活に歌ったり、美しい旋律を心を込めて歌ったりする学習は、教師も子どもも楽しいものである。教師も、子どもも時の経つのを忘れて夢中になることもしばしばである。ところが、読譜や聴唱・視唱の学習など音楽の基礎にかかわる学習は、繰り返し述べるが難しい。筆者自身も、学習を開始してみるもののそれを継続していくにはかなりの力量が必要であると感じた。強い意志をもち、継続していくことのできる教師は、音楽科授業に関する指導力量が高い教師と言えよう。

では、どうやって音楽科の学力を保障できるエクササイズ実践を行っていくか。その鍵は、このエクササイズ実践において、子どもが音楽的感受を得ているかどうかにかかっていると筆者は考え

ている。ここで、本稿において最も重要な筆者の主張点、すなわち基礎的な音楽能力の育成のための学習は子どもたちが常に音楽的な感受を得るものになるよう教師は努めねばならないという点に言及したい。

音楽的感受とは、文部科学省が音楽科における評価の観点で示した項目の1つである。この語句が意味するところは、子どもが音楽そのものやリズム・旋律等のさまざまな音楽の要素を受け止め感じ取ることである。例えば「このリズムはワクワクする」、「バラードの歌声にじーんとなった」、「バイオリンの音色にうっとりした」等の、いわゆる音楽に接したときに人の心に生じる音楽的感性と言ってよい。教科調査官である津田は、この音楽的感受こそが我が国の音楽科教育で最も重要なキーワードであると発言している。筆者も同感であり音楽の良さを味わったり音楽活動の喜びを得たりすることは、音楽的感受を抜きにしてあり得ない。基礎的な音楽能力を育成する音楽学習において、子どもが音楽的感受を常に得ていなければ学習の効果は期待できない。

## (2) リトミック音楽教育法に依拠して

さて、著名な音楽教育家ジャック＝ダルクローズが提唱するリトミック音楽教育法（塩原 2009）は、音楽の学習における体と心の動き、リズムと体と心との一体化を提唱する。リトミック音楽教育法は、リズム運動領域、ソルフェージュ領域、即興領域からなる体系的なものであり、一言で言い表せないが、学習者が音やリズムに対して即座に身体反応していくことが重要な特徴の1つである。身体反応をさまざまなバリエーションで反復しながら、1つずつ音楽的な感覚を蓄えていく。やがてその感覚が音楽能力に自然に変換するという考え方である。

これまででも、リトミックを取り入れた小学校音楽科実践は数多く報告されているし、熱心な教師たちの間では現在も学校現場での実践研究が積み上げられている。今後は、さらにリトミック音楽教育法の小学校音楽科への援用について、一般的な教師にも取り入れられるような働きかけやプログラム開発が必要であろう。リトミック音楽教育法以外にも、オルフ、コダーイ等が創始した優れた音楽教育法があるものの、筆者は小学校における基礎的な音楽能力と音楽的感受との双方を、子どもたちに最も提供しやすい音楽教育法はリトミックであると考えている。

ここではリトミックを取り入れた音楽科学習指導の工夫例として、第1学年の指導内容である「拍にのって」を紹介する。拍を感じ、拍を捉え、拍にのって、拍に合わせ、拍を何らかの方法で表現できることは、音楽の最も基礎的な能力である。第1学年では、この拍に関する能力を徹底的に学習する。この学習が第1学年の段階で不十分だと、将来、高次の音楽活動に対応できなくなる。

重要なポイントは、拍にのることの心地よさ、拍に合わせることのおもしろさを感じさせること、すなわち拍に関する音楽的感受を得させることである。

まずは、拍を聴きながら歩かせる。子どもたちを集中させるには「音楽が止まったら止まる」というルールを決めるとよい。子どもは集中して音をとらえる。しばらくしたら、拍の強さを変化させ、変化にふさわしい歩き方を示すよう指示する。次に拍の速さを変える。このように拍というテーマで、強弱や速度を変化させ、多様な拍を感受させる。もちろん、1回学習しただけではすぐに子どもは成長しない。少しずつ子どもたちの中に音楽的感受を蓄えさせていくことが大切である。歩く活動の次は、手拍子をさせてもよいし、即興で身体表現をさせてもよい。さまざまなパターンで、反復しながら子どもたちに、拍に関する音楽的感受をすり込んでいくことが重要である。やがてその蓄えが確かな感覚となり、感性をともなった音楽能力へと成長していく。

このような音楽的感受を重要視したエクササイズアプローチを実践することが、子どもたちにとって有益である。

## 5 おわりに

本稿では、小学校音楽科学習指導について、第1に、音楽科の学力を「音楽活動への態度と習慣」、  
「基礎的な表現の能力」、および「基礎的な鑑賞の能力」ととらえること。第2に、その音楽科学力を  
育成するには、特に「基礎的な表現の能力」を育成するにはエクササイズアプローチを導入する  
こと。第3に、エクササイズ実践は音楽的感受を子どもが得ることができる学習指導でなければなら  
ず、そのためにはリトミック音楽教育法の側面を援用することが効果が見込めること、を提言し  
てきた。

具体的な実践例を豊富に述べられなかったことが課題だと感じている。今後は、本稿で述べられ  
なかった音楽科学習指導を是非実践し、子どもにどのような音楽科学力が身についたか検証し、よ  
り良い音楽科学習モデルを開発していきたい。

### 《引用文献》

- ・ 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社。
- ・ 緒方満，吉富功修他（2006）「児童の「音高認識体制」を成長させる音楽科学習指導方法の実証的研究—「2声部の歌い分け」をめざしたエクササイズアプローチの検証—」『日本教科教育学会誌』第29巻3号 pp.19-28.
- ・ 小川昌文（2008）「学校の音楽教師にとって本当に必要な力とは何か—『my music』という概念の導入—」『音楽教育実践ジャーナル』vol.5 no.2 日本音楽教育学会 pp.73-84.
- ・ Phillips,k.h.（1996）*Teacing Kids to Sing*, Wadsworth Group / Thomson Learning, Belmont.
- ・ 塩原麻里（2009）「ジャック＝ダルクローズのリトミッカー「聴くからだ」と「演奏するからだ」をつくる音楽教育の基礎として—」『音楽教育実践ジャーナル』vol.6 no.2 日本音楽教育学会 pp.55-62.
- ・ 菅裕（2001）「二本立て方式」『音楽科 重要用語 300 の基礎知識』（吉富功修編集）明治図書 p.43.
- ・ 吉富功修，三村真弓他（2008）「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発（1）—中学校入学時の音楽学力の実態を中心に—」『広島大学学部・附属学校園共同研究紀要』第36号 pp.145-154.